

にいがた老舗物語

3代目の小島清介社長(76)は中学卒業後、地元工業高校への進学を希望していた。だが、祖父で創業者の外吉と母で2代目のアヤノは反対した。家業の家具塗装が忙しかったためだ。清介社長は定時制に通いながら家業を手伝ったが、時折学校を休まなければならぬほど多忙だった。

住宅関係の塗装を手掛けるようになったのは、高校を卒業した2年後。同じ塗装業を営んでいた外吉の友人が、一般住宅の塗装の協力を求めてきたのがきっかけだった。家具塗装の仕事が徐々に減る中、「家具塗装だけでは生活が厳しいだろう」と声を掛けられた。

住宅塗装はとりわけ丁寧な仕事求められる。内装では、床や階段などは透明塗料を塗ってつやを出す。塗り方にむらがあったり、ほこりが付いたりしてはならない。いかに手際よく仕上げるかが大事なポイントだ。細かい家具の塗装をしてきた清介社長の経験と技術が生きた。

1960年代、高田地区は新しい造成地に住宅が次々と建った。アヤノは引き

確かな職人仕事 小島塗装店 (上越市) 3

会社設立、建築本業に



県の発注工事を初めて落札し、橋桁を塗装した港橋＝上越市

公共施設工事にも参入

続き家具のニス塗りをし、外吉は漆塗りをしていた。清介社長の丁寧な仕事の評判となり、住宅塗装の仕事が増えていった。

には限界があった。当時は職人を雇っていなかったため、仕事が入ると清介社長は外吉の弟子をお願いして手伝ってもらったという。

椅子1脚を塗って1500円の時代に建築塗装は10万円だった。売り上げの大半を次第に住宅塗装が占めるようになった。

1963(昭和38)年、清介社長は24歳で2級建築塗装技能士の国家資格を取った。役所の仕事を受注するには、国家資格の有無は大きかった。資格取得後は、県道に立てられているポー

住宅塗装は天候などを見極めながら素早く、かつ丁寧に仕事をしなければならず、全てを1人で請け負う

同年2月、外吉は85歳で亡くなった。「仕事に誠実に向き合えば、いつか認めてもらえる」。漆塗り職人として生きた外吉が何度も

ルや市のガス供給所の配管塗装など公共工事を請け負うようになったほか、東北電力の施設修繕などの塗装を受注した。

89(平成元)年、小島塗装店は建設塗装を本業とする有限会社になり、従業員3人でスタートした。県や上越市、郵便局などの公共工事にも積極的に参入した。しかし、当初はなかなか落札できず大手建設業者の下請けが続いた。



郵便局の外壁塗装の仕上がり具合を点検する従業員＝糸魚川市

公共工事を初めて落札したのは20年ほど前、県が発注した港橋(上越市)の橋桁塗装工事だった。

初めての「大仕事」に不安を感じた清介社長は、小学校で絵を教えてもらった恩師に塗る色を相談した。恩師は周囲の景観に合う色としてタークピンクを選び、県も了承した。以降、小島塗装店は公共工事の仕事を徐々に受注するようになる。

口にした言葉を清介社長は「家訓」としている。一般建設業許可を取った74年に小島塗装店の看板を掲げた。建設業許可を取ることで公共工事入札への参加資格が得られた。落札すれば、元請けとして仕事を請け負うメリットは大きいからだ。86年、家具塗装と経理を担当していたアヤノが72歳で亡くなった。